

ひがた 干潟のいきものを さがしてみよう

干潟は一見したところ、まっ平らで単調なところである。また、砂泥（さでい）中に潜って暮らす動物がほとんどであることから、ただ眺めているだけでは多くの生きものにお目にかかれない。潮が満ちている時には海を眺めるだけで終わってしまうだろう。

でも、潮が引いて干潟が出ている時に歩き回って、石ころをひっくり返したり、護岸の下の方をのぞいたり、巣穴の辺りを掘ってみたりすると、干潟特有の生きものを発見できることだろう。ヨシ原やアマモ場とつながっているところでは、さらに多くの生きものを発見できるに違いない。

また、このような干潟は、カニや貝やゴカイたちを餌とするシギやチドリ類などの鳥類、ハゼやカレイなどの魚類、ワタリガニなどのエビカニ類が訪れるところでもある。干潟一帯はこうした多くの種類の生きものが、潮の満ち引きに合わせて活動し、共存している場なのである。



ヨシ原

アマモ

干潟に出かけるときの服装

水辺では紫外線が強いので、なるべく肌を露出しないようにするのが良い。シャツが濡れるようならば袖をたくれば良いし、ズボンが濡れても乾きやすいジャージなどがおすすめ。

帽子は熱射病を防ぐためにも必ず着用すること。風に飛ばされないように、ストッパーを付けておくとうまい。また、首筋の後ろが日焼けするととても疲れるので、タオルを首に巻いていこう。春先で風が冷たい時には、保温効果もある。

干潟では水辺を歩くことになる上、泥分が多くてぬかるむ所もある。また、カキ殻などが砂の中に埋まっていたりすることも多い。このため、足に怪我をしないためにも長靴や胴長（ウェイダー）が望ましい。あるいは、濡れても良いようなスニーカーやダイビング用のブーツをはこう。ビーチサンダルは干潟の泥にはまると抜けなくなるし、怪我をする確率も高いので使わないように。



このパンフレットは、公益信託TaKaRaハーモニストファンド「市民参加型干潟調査手法の普及と調査の実践」の助成により作成されました。また、パンフレットの内容は、公益信託経団連自然保護基金の助成により作成された『干潟生物調査ガイドブック～東日本編』に基づいています。

作成：鈴木孝男（東北大学生命科学研究科）、
佐々木美貴・中川雅博（日本国際湿地保全連合）
問合せ：日本国際湿地保全連合
Tel.03-5614-2150 Fax.03-6806-4187



観察のポイント

干潟には穴がいっぱい

干潟を歩くと、いろいろな大きさの穴があちこちに開いているのが目につく。一番大きなものはヤマトオサガニの巣穴だ。ヨシ原ならばアシハラガニだろう。砂地に砂団子をまき散らし直径1cmほどの穴を開けているのはコメツキガニ。干潟が凸凹になってそこに穴があったらニホンスナモグリの巣穴だし、チューブから絞り出したような泥が乗っかっていたらタマシキゴカイが出したものだ。潮干狩り場で小さな円形の穴が2つ横に並んでいたら、アサリの水管である。

サビシラトリガイは薄茶色の長い水管を穴から出して干潟の上にとまった餌を吸い取っている。もっと小さな穴はカワゴカイのものかもしれない。ゴカイの仲間では、地面の上に管を出しているものもある。ツバサゴカイはU字管を作るので、管は必ず2本出ているし、スゴカイイソメは管の周りに貝殻や石などをくっつけている。

石をひっくり返してみよう

干潟上にころがったり埋もれている石には、巻貝やフジツボが付着していることが多い。しかし、その他にもかくれ家として利用する生きものもいる。石を静かにひっくり返してみると、裏側にイシダタミなどの巻貝やヒメケハダヒザラガイなどがくっついていたりする。あるいはコツブムシの仲間がチョコチョコとはい回っているかもしれない。また、石の下のすき間にはケフサイソガニが潜り込んでいたり、ゴカイの仲間が見られたりする。歩いていく貝殻にはヤドカリが入っているのに違いない。

観察した後は、石を元どおりにしておこう。



イシダタミ

ヒメケハダヒザラガイ

コツブムシ類

護岸壁を見てみよう

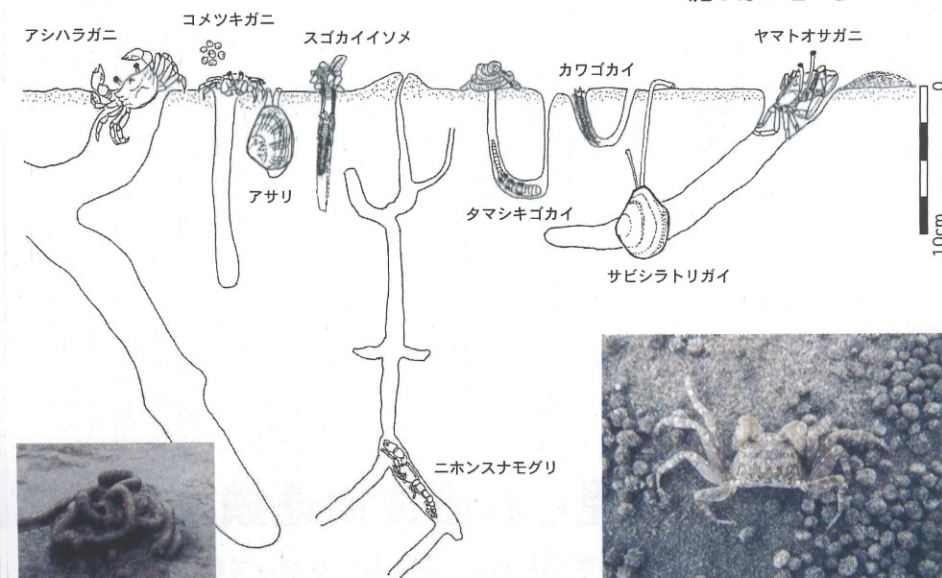
干潟の周りの護岸壁にはいろいろな生きものが付着している。潮位や波しぶきのかかり具合によって、動物たちの付着場所が異なり、帯状の分布が見てとれる。高いところにはカサガイ類のカモガイがピタッとくっついており、中間ぐらいにはシロスジフジツボ、中間から下の方にはマガキやタマキビやスガイが付着している。

また、カキ殻や殻の間のすき間は動物たちにとって絶好のかくれ場所でもある。カニやヤドカリの仲間が見られるかもしれない。



←砂っぽいところ

泥っぽいところ→



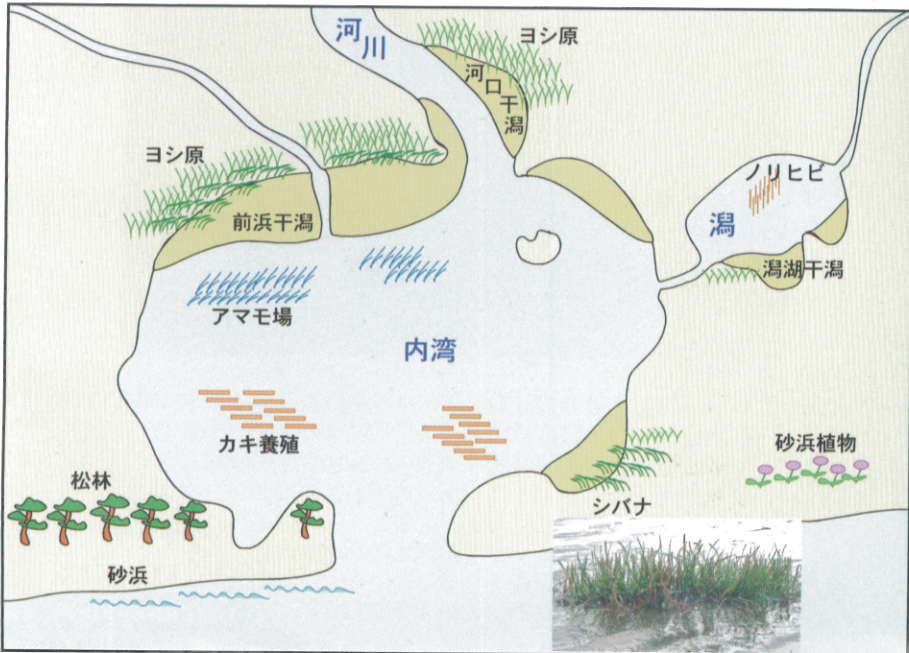
干潟ってどんなところ

潮の満ち引きは、月と太陽の引力によって引き起こされる。内湾や河口の岸边など浅い海域では、干潮になり潮が引くにつれて、今まで海だったところに砂や泥の地面が現れ、一面の干潟になる。

干潟の特徴を一言でいうと、水深が浅く、傾斜がゆるやかで、底土がやわらかい、ということになる。流れがゆるやかなために、海や川から運ばれてきた有機物などのよごれがたまりやすいが、これが干潟にすんでいるカニや貝やゴカイなどのベントス（底生生物）の餌になる。また、太陽光が底まで届くことから、海水中だけではなく、底土上にもケイソウなどの藻類がたくさん増殖し、これもベントスの餌になる。

ベントスは泥や砂の上を歩き回ったり、巣穴を掘って生活しているが、干潮の間はシギ・チドリやサギの仲間が餌としてねらっている。潮が満ちてくると、今度はカレイやハゼなどの魚の餌になる。

魚の子供にとって浅い水域は外敵に襲われる心配の無い『保育所』である。また、北国と南国の間を旅する渡り鳥たちにとって、干潟は休息したりエネルギーを補給するための『国際空港』なのである。



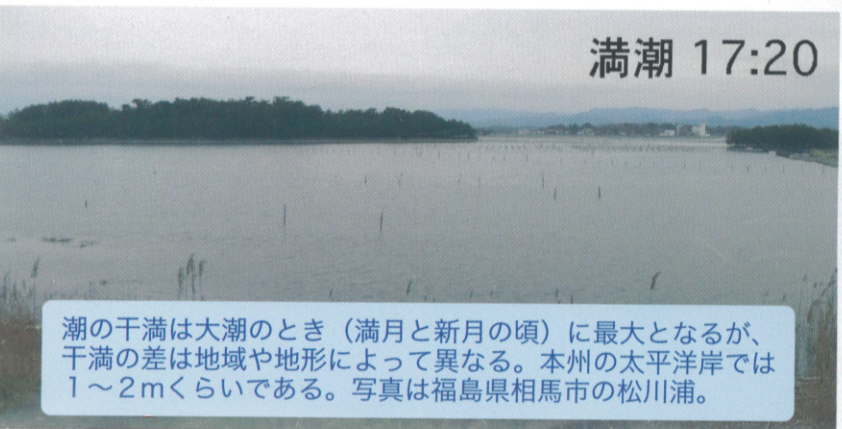
干潮 10:40



上げ潮 13:30



満潮 17:20



潮の干満は大潮のとき（満月と新月の頃）に最大となるが、干満の差は地域や地形によって異なる。本州の太平洋岸では1~2mくらいである。写真は福島県相馬市の松川浦。

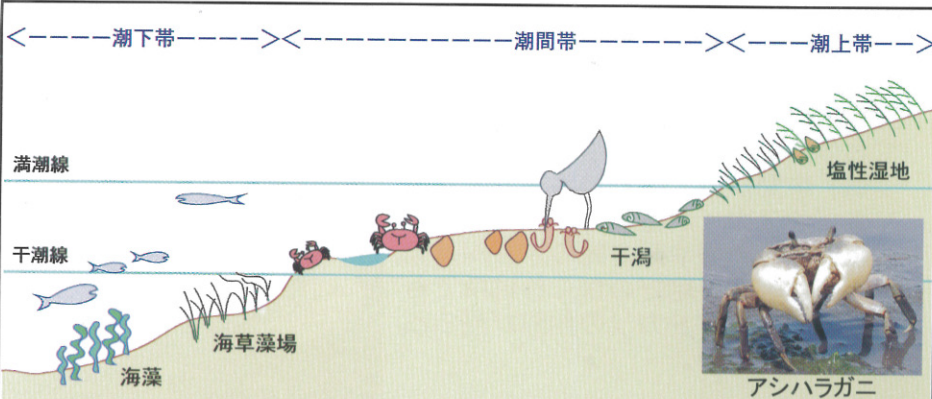
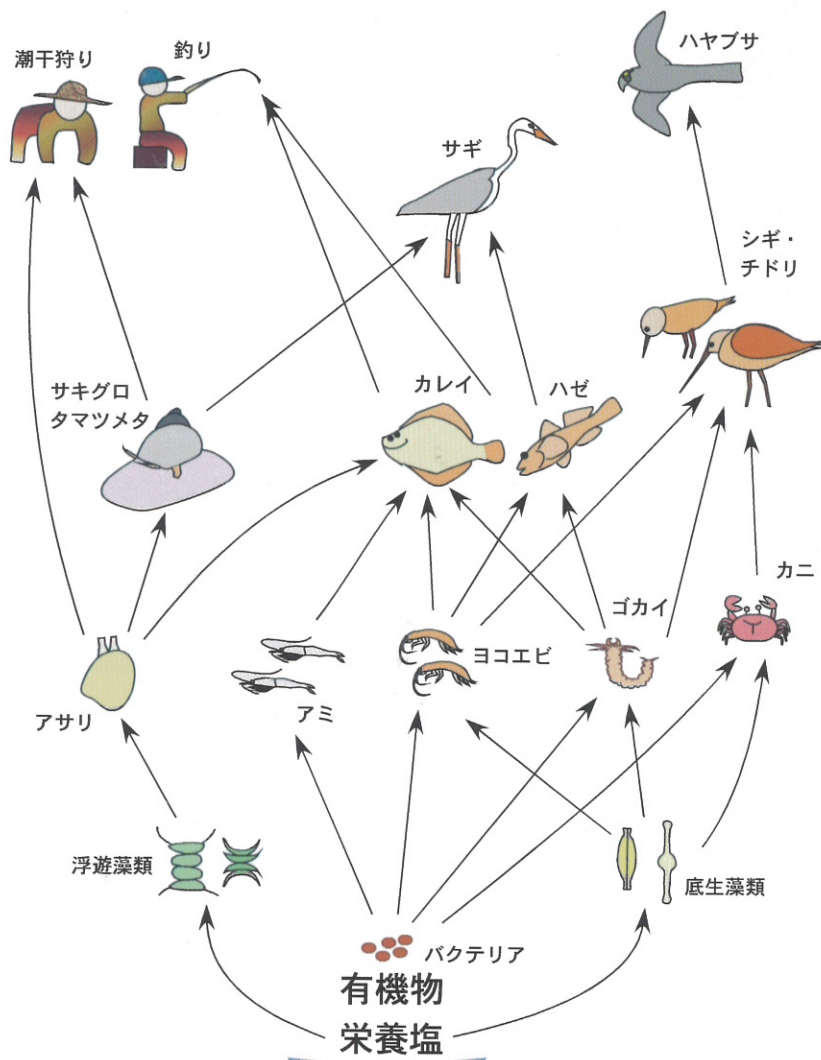
生きものは活動を潮汐リズムに合わせている

二枚貝のサビシラトリガイやアサリは、干潮で潮が引いている間は砂泥中でじっとしているが、潮が満ちてくると水管を伸ばして餌をとる。アサリは海水を吸い込むことで、プランクトンをろ過して食べている(ろ過食)が、サビシラトリガイは水管を長く伸ばし、底土上にたまったものを吸い取って餌にしている(堆積物食)。また、砂泥中にすんでいるタマシゴカイは、砂や泥を食べて、その中に含まれる有機物を餌にしている(泥食)、余分な砂や泥を底土上に排泄する。

潮が引いて干潟が出ると活動を始める生きものの代表はカニの仲間である。コメツキガニが餌をとった残りの砂を丸めて砂団子を作ったり、チゴガニがハサミを上下にふってダンスをするのが見られるだろう。

生きものの分布

満潮線と干潮線の間を潮間帯という。潮間帯の上部でヨシ原などの塩性湿地が広がるあたりを潮上帯、潮間帯の下部で潮が引いても干上がらないあたりを潮下帯と呼ぶ。潮下帯には海草のアマモや海藻の仲間が生育している。潮間帯上部であまり海水に浸からないところには、ヒメハマトビムシやコメツキガニがみられ、さらにその上部にはアシハラガニがすんでいる。潮間帯中部の砂っぽいところにはイソシジミやホソウミナガ、泥っぽいところにはカワゴカイやヤマトオサガニやオキシジミが分布する。また、たまにしか干上がらないところにはマメコブシガニや外来種のサキグロタマツメタがすんでいる。



干潟で見られる食物連鎖

ひとつの生命は他の生命を支え、みんなつながっている。

